

「自分自身との関わりで課題を捉え、考える子どもの育成」
 ～日常から課題を見出し、多面的・多角的な考えをもてる道徳科の授業を通して～
 厚沢部町立厚沢部小学校 学級数8 (校長 松村 浩良)

I 研究テーマ設定の理由

令和4年度の研究テーマを検討する際、「自ら課題を見つけ解決すること」、「自発的に行動すること」の2点が、児童の課題として確認された。課題を解決させるためには、道徳科を要とした道徳教育の充実が必要なことも確認された。こうしたことから、本校では、自分自身との関わりで課題を捉え、多面的・多角的な考えをもてる道徳科の授業を目指すこととした。

II 実践内容

1 道徳科の指導計画の改善

本校では、道徳科の指導計画を改善するために、「多面的・多角的な考えをもてる授業の流れ」、「事前・事中・事後の指導計画」について研究を推進した。

(1) 多面的・多角的な考えをもてる授業の流れ

① つかむ	日常生活から道徳テーマを考え、課題を見出す。
② 見出す	教材を通して道徳的課題を発見し、道徳的価値への理解を深める。
③ 広げ深める	課題を自分事として捉え、多面的・多角的に考え、自己の考えを広げ深める。
④ つなげる	自身の考え方の変容に気づき、今後どのように生かせるか考える。

多面的・多角的な考えをもてるよう、「広がりや深まりを実感できる授業づくり」「納得と発見が見出せる授業づくり」を目指した。そのために、日常から課題を見出し、本時のねらいに合致した主発問に重きをおいた。また、振り返りを工夫し、自身の考えの変容に気付くことができるようにした。

(2) 事前・事中・事後の指導計画

道徳科の指導計画を作成する際、児童の実態に合致したものにするために、事前と事中（本時の道徳科）、事後の活動を明記し、教育活動全体とのつながりが「見える化」できるようカリキュラム・マネジメントに取り組んだ。

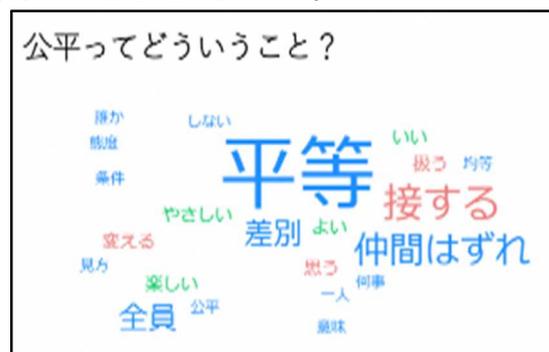
事前の共通体験では児童の実態を見取り、事中では導入を工夫し、課題意識を醸成させた。また、事後には実践の場を設け、道徳科の授業が実践意欲にどうつながっていたかを見取った。このように3段階の計画を設けることで、一過性の学びではなく継続的な学びとなった。また、道徳科のねらい（道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度）を達成させるために、事前・事中・事後のつながりを踏まえ、意図的・計画的に指導計画を作成することも可能となった。

2 協働的な学びを促進させるための ICT 活用

協働的な学びを促進させるために、ロイロノートの共有機能を活用し、短時間でクラス全員の考えを共有させたり、思考ツールを使用し児童の思考を整理させたりした。

また、道徳科の事前アンケートで児童の考えを焦点化させるためにテキストマイニングツールを使用した。

ICTの活用は、児童が他者の考えや価値観に触れ、考え議論する道徳への手立てとなった。



テキストマイニングツール

III 成果と課題 (○成果、●課題)

- 児童が課題に対して自分事として向き合い、自分の考えを具体的に伝え合うようになった。また、友達の意見と自分の意見を比較しながら話し合いを進め、考えを深める様子が見られた。
- 指導者が授業の流れや、指導計画、ICT活用を工夫することで、ねらいの達成を重視した授業を構築できた。またカリキュラム・マネジメントの意識を高めることができた。
- 事前・事中・事後の指導計画を基に別様の見直しをするなどして、道徳教育の重点目標に迫る必要がある。

9年間の系統性を意識した、道徳科の授業の実践

比布町立比布中央学校 学級数9 (校長 三浦 秀也)

I これまでの概要

本校は、令和4年度の義務教育学校開校に向け、令和3年度には小・中学校の校務分掌ごとに部会を設け、課題を検討してきた。

研修部会では、研修体制が小・中学校で1つになることに伴い、何をテーマに研究を推進するかについて何度も話し合った。

話し合いは、研修を通して前期課程と後期課程がお互いを知ること、全教職員が9年間の系統性を踏まえて実践できる内容であることをポイントに行った。

話し合いを踏まえ、令和4年度から義務教育学校研修部の重点の1つを「系統性を意識した道徳科の授業」として研修活動をスタートした。



【図①】前期・後期課程教員による指導案検討

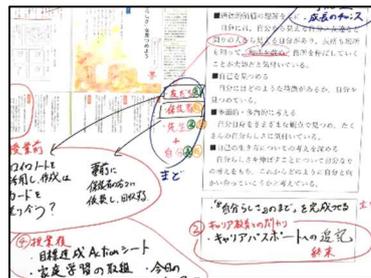
II 実践の概要

(1) 前期・後期課程が一体となり取り組む授業づくり

前期・後期課程の教員を混合して、第1～9学年の授業グループを編成し、学習指導案検討を重ねた(図①)。

各グループの討議では、印刷した資料を貼り付けた模造紙とタブレットを使用して行い、事前資料や話し合いの結果などは、クラウド上に保存し、常に全体で内容を共有した。(図②)

11月の町教育研究会公開授業に向けて、前期課程教員による後期課程への乗り入れ授業を10月から開始している(図③)。



【図②】ICTを活用したグループ討議資料

(2) 系統性を意識した授業づくり

令和元年度に、道徳科の9年間の内容系統一覧を作成しているが、重点的に取り組む内容項目「向上心、個性の伸長」について、「ねらい」「学びの姿」を詳細な系統表としてまとめた。(図④)。

この系統表を基に、当該学年の現在の姿と比較しながら、9年間の系統を意識して学習指導案の作成を行った。



【図③】前期課程教員による乗り入れ授業

(3) キャリア教育を意識した授業づくり

学習指導案の検討の際に、内容項目「向上心、個性の伸長」とキャリア教育における基礎的・汎用的能力「自己理解・自己管理能力」との関わりを意識し、総合的な学習の時間で使用している「キャリアパスポート」の効果的な活用方法等について、グループで話し合った。

(4) 評価の場面・方法を意識した授業づくり

授業づくりでは、児童生徒が授業を通して、どのような姿になればよいのかを具体的に設定するほか、授業のどの場面で、どのような方法で、どんなことを評価するのかを明確化し、学習指導案に位置付けた。また、学習評価の充実に向けて、評価材料(道徳ノート、ワークシート、学習支援アプリのカード)の蓄積も計画的に行った。

学年	目標	学習	評価
1年	目標をかなげやめて、みんなが応援、みんなが	自分らしさを大切に、自分のまわり	授業を通して、学ぶ
2年	自分の思いや気持ち、わがこと、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	「自分らしさ」の大切さ、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	授業を通して、学ぶ
3年	自分の思いや気持ち、わがこと、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	「自分らしさ」の大切さ、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	授業を通して、学ぶ
4年	自分の思いや気持ち、わがこと、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	「自分らしさ」の大切さ、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	授業を通して、学ぶ
5年	自分の思いや気持ち、わがこと、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	「自分らしさ」の大切さ、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	授業を通して、学ぶ
6年	自分の思いや気持ち、わがこと、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	「自分らしさ」の大切さ、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	授業を通して、学ぶ
7年	自分の思いや気持ち、わがこと、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	「自分らしさ」の大切さ、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	授業を通して、学ぶ
8年	自分の思いや気持ち、わがこと、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	「自分らしさ」の大切さ、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	授業を通して、学ぶ
9年	自分の思いや気持ち、わがこと、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	「自分らしさ」の大切さ、仲間と協力して、みんなが応援、みんなが	授業を通して、学ぶ

【図④】重点内容項目に係る系統表

III 成果と課題

- 前期・後期課程の教員を混合して学習指導案検討グループを構成したことにより、児童生徒の発達の段階に応じた様々な視点から話し合うことができ、9年間のつながりを意識した検討を行うことができた。
- 学習指導案を作成する前に、前期・後期課程の互いの道徳科の授業の様子を知るために、授業を見学する機会を設定したことにより、9年間の系統性を意識するとともに、乗り入れ授業にもつなげることができた。
- 今年度は、「向上心、個性の伸長」を重点として取り組んできたが、今後は、他の内容項目について、系統表の作成を含め検討していく必要がある。
- 前期・後期課程の教員が、気軽に互いの授業を参観し合うことができるよう、時間割作成も含め、時間の取り方を工夫していく必要がある。

考え、伝え合い、認め合う道徳科の授業づくりの取組

帯広市立大正小学校 学級数9 (校長 高山亮司)

I 取組の概要

本校では、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために、研究主題を「自己をみつめ、豊かな人間性を育む学びの創造」と設定し、考え、伝え合い、認め合う道徳科の授業改善に向けて「意図のある授業構造」、「伝え合う活動」という2つの取組を推進している。

II 実践の概要

1 意図のある授業構造

(1) 自己の生き方を深める学習指導過程

学習指導過程を「つかむ」「ふかめる」「みつめる」の3つの段階に分けて構想し、「つかむ」段階では、導入を工夫し、学習のねらいを明確にすること、「ふかめる」の段階では、内面的価値を引き出す発問の工夫を行うこと、「みつめる」の段階では、自己の内面をみつめる場を位置付けることを基本として全教職員で共通理解を図っている。道徳科の授業を通じて、児童が問題意識をもち、自己の生き方について考えることができるよう、指導者の意図を明確にした授業実践に取り組んでいる。

(2) 自己の生き方を深め、確かにする発問の工夫

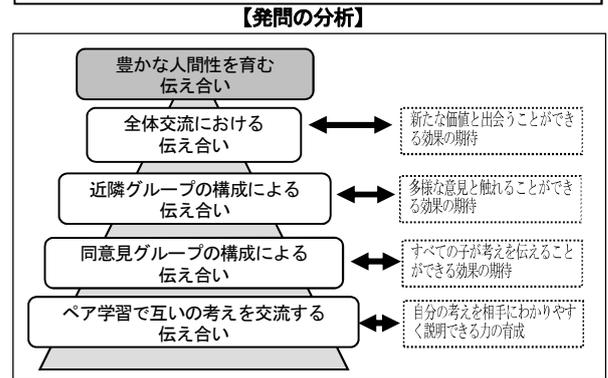
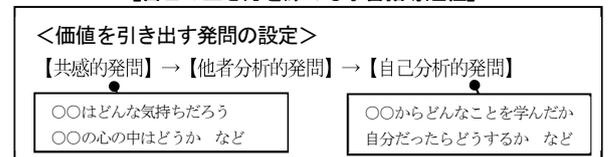
児童の多様な価値を引き出すために、発問を分析し、教材の特性や学習展開に合わせて、中心的な発問や問い返しの発問を吟味し、児童が多様な考えに触れ、一人一人が、自己の生き方についての考えを深める道徳科の授業づくりを目指している。

2 伝え合う活動

ペア学習やグループ交流、全体交流など、自分の考えを伝え合う活動の意義やねらいを整理し、全教職員で共通理解を図り、授業実践に取り組んでいる。

また、児童が1人1台端末を活用し、共同編集機能等を利用して、多様な他者の考えに触れるように工夫することで、自己の考えが深まるようにしている。

学習活動	指導上の留意点・支援
問題意識を呼び起こす 	○導入の工夫 ・道徳的価値の方向付けに対し、様々なアプローチの仕方があることを誘発する導入の設定 ・体験を生かした導入の設定(具体的思考の活用) ○学習のねらいづくりの工夫 ・「考えたい!」という意欲をもたせるためのねらいの設定 道徳的価値の方向付けを明確にし、問題意識を喚起する
つかむ 	○内面的価値を引き出す ・中心的な発問や補助発問で、主題にせまる道徳科的価値を引き出す ・交流により、多角的・多面的に道徳科的価値について考える。 意図のある発問により、内面的価値を引き出す
ふかめる 	○自己の内面をみつめる場の設定 ・教材で閉じないよう、主題を自分事に結び付け考える発問をする。 ・自己を振り返る場面を設定する ・同じ発言内容であっても自分の言葉で発表し、互いに認め合う 【自己の生き方を深める学習指導過程】



III 成果(○)と課題(●)

- 学習指導過程について共通理解を図り、意図ある指導を意識した授業実践を継続したことにより、児童が見通しをもって学びに向かうなど、主体的に考える態度を育成するとともに、自己を見つめ、生き方を考え、深めていく姿が見られた。
- 発問を分析し、価値を引き出す発問を設定することにより、授業の中でねらいに正対した発問構成を整理することができ、児童が考えを深める姿が見られた。
- 児童の実態やねらいに応じて、伝え合う場の設定を構成することで、児童が安心して考えを発表し、自分事として思考を深めることができた。
- 「つかむ」段階でねらいに関わる問題意識をもたせる手立てが形骸化していることから、地域教材や身近な話題を活用するなど、児童の意欲を喚起させる手立てについて検証する必要がある。